

2 章

漢字で見違えるほど成長／現場からのレポート

集中力、考える力、言葉の力、理解力、感性……

「漢字教育で育った集中力や語彙の豊かさが成長の土台に」

第一・第二ひかり幼稚園（川崎市）

理事長 松本壯次氏

私どもの園が石井式漢字教育に取り組みはじめたのは昭和四十三年です。また先代の理事長 吉田尚弘の頃で関東では最初の石井式の実践園としてスタートしました。

当時のことは私も話に聞いているだけですが、やはり周囲には「なぜ、幼稚園児に漢字なんか」という抵抗感が相当あったようです。ところがそれも、実際に子どもたちがこともなげに漢字を覚えたり、さらには漢字教育を通して成長していったりする姿を見ていただくことで、保護者の方からも深い理解を得られるようになりました。

今や漢字教育は、二十五年前から導入している「はだか保育」と並んで、当園の教

育の柱にもなっています。

漢字教育の効果として、まずはつきりと現れてくるのは、集中力です。園児たちがなかなか先生の話をしちんと聞いてくれない、という悩みを幼稚園関係者からよく耳にしますが、年少の頃から、漢字カードや絵本をみんなで声を合わせて読み、また出席をとったり、お話をするときも、その都度漢字カードを見せながら進めていくと、子どもたちは、先生が何か話しているときには、きちんと目と耳を集中させる習慣が自然に身についてくるのです。

そして、もう一つ大きいのが、漢字を通して語彙が豊かになっていくということでしょう。当園では、学年別に月毎に割り振られた二〇〇〜三〇〇枚程度の漢字カードや漢字の絵本の他、^{ことわざ}諺や俳句、『百人一首』、詩、『論語』などのさまざまな古典や名作を教材として使っています。これらは、幼児が深い意味まで理解するのは無理ですが、そ

れはそれでいいのです。

以前、地震の避難訓練で先生が机の下に入るよう指示したところ、園児のひとりが隣の友達を見て「それは、頭隠して尻隠さず、だね」なんて言ったのを聞いて、なかなかうまいことを言うものだと感じさせられました。

もちろん、見たままを習った諺に当てはめただけで、的確な使い方ではないかもしれませんが、今は子どもなりの理解でしかなくても、言葉として頭に残っていれば、大人たちの会話を問いたり、本を読んだりしているうちに、だんだん本来の意味がわかってくる、そうした自分で発見する喜びを残しておいてあげることが大切なのです。

『論語』なども、まさにそうです。幼児の頃は丸暗記しただけにすぎなくとも、一代になって読み返してみると、「ああ、あれはそういう意味だったのか」とわかるよう

になる。また三〇代、四〇代……、そして七〇代になったときには七〇代なりの理解があつていい。むしろ、それこそが本当の意味での教育ではないかと思えます。

また、語彙が豊かになれば、言葉の組み合わせもどんどん増えていくわけですから、当然表現力や理解力、思考力も育っていきます。ですから、小学校へ行っても、先生の話がよくわかるし、わかるから授業が面白くなります。本を読むことにまったく抵抗がないので、自分の興味に応じて、どんどん世界を広げていくこともできます。

私どもとしては、決して小学校の準備教育として、漢字教育を取り入れているわけではありませんが、すべての教科のベースとなる国語の力を育てることは、結果として小学校での生活を意欲的に送るための土台づくりにもなっていると考えるでしょう。

日本の幼児教育は、まだまだ「子どもをのびのびと遊ばせて、個性を育てる」という自由保育が主流を占めています。真の個性や主体性といったものは、自ら考える力

が身についてこそ生まれてくるものであって、ただ好きに遊ばせておけば自然に育つというものでは決してないはずです。

まして、大脳生理学的に見ても、幼児期は言葉を吸収するのにもっとも適した時期ですから、この限られた貴重な時間に、楽しみながらたくさん言葉に触れさせてあげるのは、言葉の動物・人間としての成長にも大きな意味をもっていると確信しています。

「漢字を使ったゲームや遊びで集中力や考える力が育つ」

第二ひかり幼稚園(川崎市)

高島田史子先生

私自身、この幼稚園に来た当初はそうだったのですが、大人にとっては、漢字って「難

しいもの』っていうイメージがありますね。だから「どうして幼児に漢字を？」と思ってしまいます。でも、子どもたちには、そもそも漢字とかひらがなとかいう区別がないので、難しいことをやっているという意識はないのです。『論語』や『百人一首』にしても、子どもには何の先入観もないので、ふっふうのお話と同じような感覚で読んでいます。

それに、入園したての年少さんの場合、まずは幼稚園の生活に慣れることからスタートしますが、そのときに「これが上履きですよ」「これが黒板ですよ」と教えるときに、一緒に漢字で「上履き」「黒板」と書いたカードを見せたりと、身のまわりのものから自然に漢字に触れていくので、子どもたちは、まったく抵抗なく入っていきます。

カリキュラムには、絵本やその月毎の漢字カードの他、『論語』や『百人一首』など、一日の中でもいろんな項目があるので、知らない人が聞くと、漢字ばかりやっているような印象を受けるかもしれませんが、実は一つの課題にかける時間は、五分とか十分と



漢字ゲーム「魚釣り」の教材

いったとても短い時間で、これを一日何回かくり返す形をとっています。ですから、ふつうの幼稚園でやるお絵描きや工作、歌、体操などの時間も、もちろんきちんともあります。

なぜ、そんな短い時間で区切ってやるかといいますと、子どもと大人では時間の感じ方が違うからなのです。大人なら一つのことを三十分、一時間と長くやっても平気ですが、

子どもの場合、いろんなことに次から次へと興味が湧いてくることもあって、短時間で区切って、くり返しやったほうが集中力も持続しやすいのです。

それに、少し前にやったことをまた後でやると、同じ内容でも。あ、これ、さっきやったから知ってる」と感じる事ができる、それが子どもたちには、すごく嬉しいみたいなのです。

子どもたちが漢字に接するときには、いつもゲーム感覚で楽しめるように、先生方もそれぞれに工夫しています。たとえば、ふだん使っているカルタ以外に、動物の名前を書いた漢字とその動物の絵を合わせたり、子どもたちが魚屋さん、八百屋さんなどのお店屋さんに分かれて、魚屋さんになった子は、たくさんあるカードの中から「鯛たい」や「鯛」など魚屋さんで売っているものを見つけて待ってきます。また「公園」や「駅」などの漢字カードと絵を合わせて、好きなところに貼って街をつくる遊びなども、子どもた

ちの好きな遊びです。一応、基本的な遊びというのはありますが、それをもとに「こんなことやったら楽しいかな」というアイデアをそれぞれが考えて、そのための教材を用意したりしています。

子どもたちを見ていると、「スゴイな」と驚かされることはしょっちゅうです。年少さんでも、新しく出てきた漢字がたまたま誰かの名前に入っている字だったりすると、「あ、これ〇〇ちゃんの字だー」と、子どものほうから反応してきますし、だんだん漢字に慣れてくると、一つの文字を全部見せず、上や右から、少しずつ見せていっても、ほんの一部を見ただけで、もう何の字かわかってしまいます。

それに、はじめて見る漢字でも「これ『魚』っていう字がついてるから、魚の仲間だね」とか『森』っていう字は、木がいっぱいあるね」とか、こちらからは何も説明していないのに、そういう発見が子どもたちから自然に生まれてきます。

子どもたちは純粹に漢字の形から入っているので、子どもたち白身が「もしかしたら、この字は、こういう意味なのかな？」と自分で考えることができる、そのことが何よりも素情らしいと思います。

「物事に意欲的に取り組む姿勢や自分で考える力がついた」

第二ひかり幼稚園(川崎市)

園児のお母さん 中塚浩美さん

現在、小学校三年生の息子、そして幼稚園年長組の娘と、子どもたちは二人とも第二ひかり幼稚園で、石井式漢字教育の指導を受けています。

上の子を幼稚園に入園させるときは、正直言ってそれほど「漢字教育」を強く意識していたわけではなく、有名なドーマン博士の教育理論とも接点が多いという話を聞

いて、子どもに何かプラスになればという程度だったのです。

でも、子どもの吸収力というのは本当にすごいですね。ひらがなから教えられた私たち大人からすると、最初から漢字なんて教えて大丈夫なのかしら、と思ってしまうのですが、当の子どもたちは、難しい漢字もどんどん覚えてしまいます。ひらがなも、改めて「あいうえお」という教え方をしなくても、漢字の送りがなで自然に読めてしまいます。もともと日常身のまわりにある文字というのは、ほとんどが漢字かな交じりなので、本来漢字で表記するものは、はじめから漢字で教えてあげたほうが子どもにとってはわかりやすいようです。

実際、電車に来るときに、表示を見て「これは〇〇行きだね」と言ったり、新聞の番組欄で自分で観たい番組をチェックしたり……、そういうことが幼稚園のうちから自然にできていました。

親の立場からしても、まだ小さいから漢字が読めなくても当たり前、という感じですし、学校のように成績がつくわけでもないのに、読めたら「すごいね」と素直に誉めてあげられます。親が、そうした心の余裕をもって接してあげられるのも、幼稚園から漢字を学ぶメリットと言えるかもしれません。

おかげで上の息子は、小学校に入っても本を読むのが大好きです。去年の夏休みに、当時ベストセラーだった『五体不満足』を手渡すと、毎日数十分ほどしか読んでいないのに、一週間足らずで読み終えてしまいました。ほとんどの漢字にルビが振ってあるものの、文字が多いので「本当にちゃんと読んだのかしら」と私のほうが不安になって聞いてみると、一応話の内容はきちんとわかっていました。みたいです。

また、こうした知的発育の面よりも、さらに大きいのが内面的な成長ではないかと思えます。たとえば、幼稚園から出される課題に「素読百回カード」というのがあります。

す。これは、漢字かな交じりで書かれた古典や名文を家で一回音読することに親がハ
ンコを押してあげ、五〇回目、一〇〇回目は幼稚園で先生に聞いていただいて、きち
んと読めればシールがもらえる、というものです。

決して強制ではないのですが、「何か目標をもって、それに対して努力を積み重ねて
いける人間に育ってもらいたい」という、私自身の思いもあって、上の子のときから毎日
欠かさず続けるようにしました。時間にすれば、一日三十分足らずのことなんです
が、自分がやったことに対して、シールがもらえたり、そのシールがたまるとミニ賞状
をもらえたりと、きちんと評価してもらえるのがすごく自信になるみたいです。逆に、
人から認めてもらうには、自分がやるべきことをやらないとダメなんだということも、
子どもなりにわかってくるみたいで……。

ですから、上の子は小学校に入ってからも、宿題などはあまり親がうるさく言わな
くてもやりますし、何かやりたいこと知りたいことがあると「じゃあ、本で調べてみよ
うか」というように、自分でものを考える力がついたのが大きいと思います。学校の担
任の先生からは「何にでも意欲的に取り組んでくれる」と言われ、私も嬉しく思ってい
ます。

下の女の子のほうは、この先、学校へ上がってどんなふう成長していくのか、まだわ
かりませんが、一年ほど前から習いはしめたピアノの先生には「教えたことがきちんと
できて、楽譜がちゃんと読めて、音が聴き取れて、もう小学生みたいですね」と言われ
たりします。これも、漢字教育によって培われた集中力や理解力のおかげかもしれ
ません。

自分の学校時代を思い出してみると、漢字の勉強ってただテストで点数をとるための
勉強でしかありませんでした。ですから、改めて子どもたちと一緒に漢字に触れて

みると、漢字の意味や成り立ちなど新しい発見がたくさんあります。その意味で、いちばん楽しんでいるのは、もしかしたら私自身かもしれないませんが、子どもたちにとっても、知育だけでなく人間としてのいちばん根この部分の成長に、漢字教育は大きな役割を果たしてくれているのではないかと思っています。

「子どもたちはみんな漢字が大好きで、ねだられるほど」

梅島幼稚園(足立区)

佐々木美紀先生

「みんな、今日はどこに来たのかな？」

入園したての三歳児は、本当に小さくて、床に座った子どもたちに視線を合わせるため、こちらもしゃがみながら、こう尋ねます。

「梅島幼稚園！」

子どもたちの元気な答えが返ってきます。

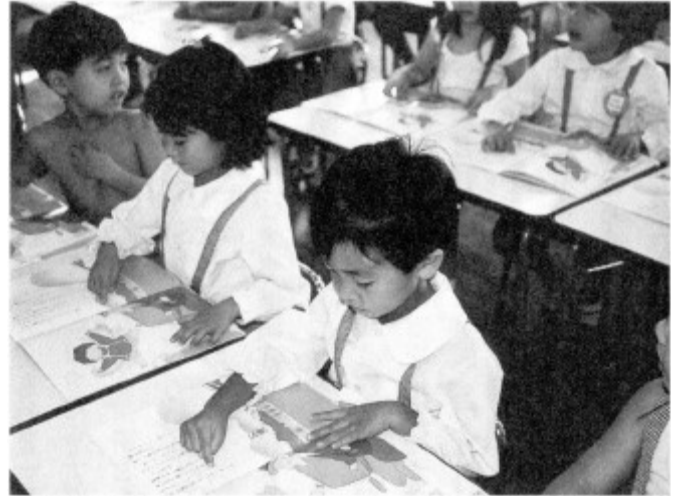
「そう、梅島幼稚園だよね」

そう言って、「梅島幼稚園」と漢字で書いたカードを見せると、先生が持っているのは何だろうと、子どもたちの視線が自然に漢字に集まってきます。そこで今度は、

「今、お話ししている先生は、佐々木先生っていうんだよ」

と言いながら、「佐々木先生」と書いた漢字カードを見せる……、子どもたちの漢字との出合いは、こんなふうにはじまります。

そして、まずは「椅子」や「机」など身のまわりの物を漢字カードで見せたり、絵本に出てくる言葉を漢字で黒板に書きながら読み聞かせをしたりと、常に話す言葉を漢字で見せることで、少しずつ漢字に馴染なじんでいきます。



漢字絵本を読む園児たち

だから、四歳児、五歳児になると、もう先生が漢字を使ってお話をするのが当たり前という感じで、先生のほうを見ながら、すごく集中して話を聞いています。「今度はどんな漢字が出てくるんだろう」という興味がすごくあるみたいで、新しい漢字カードを見せると、みんな、「待ってました」というように目を輝かせます。

教材としては、月一冊のペースで

漢字の絵本を読むほか、俳句や諺、それに「朗誦撰」といって、詩や古典、漢文などを集めたものの中から、学年ごとに振り分けられた課題をんだりそのあとは漢字を使わずにさまざまなゲームで遊んだりしています。

小さいうちは、どうしても口がよく回らないので、あまり長い文は読めませんが、年少さんでも、三学期になると「諺かるた」に取り組みます。一応、一日五枚くらいずつを目安にしていますが、子どもたちの気持ちに乗って「もっと、もっと」というときは、七枚、十枚と枚数を増やします。先生が「頭隠して」と言ったら子どもたちが「尻隠さず」と続けるというように、掛け合いでやるとリズムもよく、子どもたちもすごく楽しいみたいです。

そして、これが年中さんになると、島崎藤村の『初恋』、年長さんでは福沢諭吉の『学問のすゝめ』など、かなり長いものまで読めるようになっていきます。

子どもたちは、本当に漢字が大好きで「まだちょっと難しいかな」と思っているようなものでも、どんどん吸収してしまうので、こちらのほうが教材の準備に大忙し、ということも珍しくありません。

また、特別に漢字カードを用意せずに、その日の出来事を黒板に漢字を使って書きながら話したりするときでも、「今日はお空から雨が降ってきました」と言いながら「雨」という字を書こうとすると、書いている途中で「あ、雨でしょー」という声が年少さんからも上がったたりして、私自身、びっくりさせられたりします。

お母さん方からも、一緒に電車に乗っていて漢字しか書いていないのに、お子さんが「次は目白だよ」と言ったりして感心した、というような話はよく聞きます。

他の幼稚園に勤めている友達と話していると、「大きな声で呼び掛けても、子どもたちがなかなかきちんと聞いてくれない」「歌を一曲マスターするのに何週間もかかって

しまう」といった話をよく聞きますが、うちの幼稚園では、先生が前に立つと、声を張り上げなくても子どもたちはすぐ集中してくれますし、年長さんくらいになると、集中を持続できる時間も、大人がびっくりするくらい長いのです。うちの園児たちなら、漢字や工作など、いろいろなことをやりながら、一、二時間はきちんと椅子に座っていられます。歌も、漢字で歌詞を黒板に書くと言葉の意味も区切りもわかりやすいみたいで、ごく短時間で歌えるようになってしまいます。そういうところで、漢字によって培われた集中力や理解力は本当に素晴らしいと実感しています。

「漢字教育のおかげで、言葉の力や考え方は年齢以上」

梅島幼稚園(足立区)

園児のお母さん H・Mさん

実は私自身、この近くで生まれ育ったので、小学校のお友達にも梅島幼稚園出身の子がいました。その子はクラスの中心的存在で、とてもやさしくて気配りのできる子でした。「ちょっと他の子と違うな」という印象が子どもながらにありました。そんなことから、結婚して地元に移住するようになって、子どもはぜひ梅島幼稚園へ思うようになつたのです。

もっとも、上の娘のときは、まだ石井式というものがよくわかっていなかったため、入園前にひらがなを覚えさせてしまつて……。これが逆効果で、入園当初は漢字がスム

ーズに頭に入つてこなくて、本人も少し戸惑つた様子でした。それでも慣れるにつれ、漢字が楽しくなってきたようでしたが、これを教訓に下の子には入園前にはひらがなを読んだり書いたり、ということは一切やらせませんでした。やはり、まっさらな状態で漢字に触れたほうが、自然に頭に入つてきやすいようです。

それにしても、子どもの記憶力というのはすごいと思います。入園直後に、石井先生が講演にいらして、子どもたちの前で「象さんと狸たぬきさんと兎うさぎさんがピクニックへ行きました……」と、黒板に漢字を書きながらお話してくださいました。それで、家に帰ってから、試しに私が同じように漢字を書いてみると、子どもはさっき聞いたばかりのお話を情感たっぷりに話してくれるのです。あまり感激したので、お父さんが帰つてきてから、もう一度やつてもらったりして……。

漢字をやっていると、言葉や考え方もすごくしっかりしてきます。下の子はまだ四

歳ですが、自分は大人と対等という意識があるようで、こちらが下手に子ども扱いすると、すぐく反発したりします。その一方で、感情もすぐく豊かで心のひだのようなものがしっかり育ってくれているのも感じます。先日も、ちょっときつく注意したら、次の日「私、生まれてこないほうがよかった?」と聞かれて、逆に親の私のほうがドキッとしてしまいました。

上の子は、もう小学六年生になりましたが、本はいまだに大好きで厚い本でも抵抗なく読んでいます。特に、歴史に興味があって、戦争や地雷のような子どもにとってはかなり重いテーマにも真剣に向き合って、自分なりに理解しようとしているようです。そういう、真剣に物事を考える力というのも、ルーツをたどっていくと幼稚園のときの漢字教育にあるのではないかと思ったりしています。

「漢字教育の効果は学校の勉強の理解力にもはっきり現れる」

梅島幼稚園(足立区)

園児のお母さん W・Aさん

うちの子どもは、現在高一の女の子、中二の男の子、そして幼稚園年中の女の子の三人兄弟。真ん中の男の子が六年間、「石井式国語教室」にお世話になり、いろんな面でプラスになったので、いちばん下の子は迷わず、長年漢字教育を実践している梅島幼稚園に決めました。

やはり、小さい頃から漢字を通して、いろいろな言葉に触れていると、まず話し方がとてもしっかりしてきますし、文章の読解力、さらにはもっと大きな意味での理解力もついてくるような気がします。ですから、国語だけでなく数学なども、特別に塾などに通わなくてもできてしまいます。あまり兄弟を比較してはいけないのですが、

いちばん上の女の子は、きちんと授業を聞いていても、どこか理解できていない部分があるようで、やはり漢字教育を受けたか受けないかの差は大きいというのが実感です。

いちばん下の子ども、漢字にははじめからまったく抵抗なく楽しみながらやっているようです。幼稚園で使っている絵本は、先生からもくり返しお話ししていただいているので、内容はすっかり頭に入っています。それでも家では「読んで、読んで」とよくせがまれます。「諺かるた」なども「一緒にやろう」と、もうたいへんです。

それに、どこかで“家”という字を見て「象」という字に似ているねと言ったり、大人同士の会話を聞いていて「不思議って何？」と突然尋ねたりして、こちらがびっくりさせられたり、なるほどと感心させられることもよくあります。

トレーナーなんかにはプリントしてある英語のアルファベットを指して、「これ、何て読むの？」と聞かれたりすることも……。

私としては、今、英語までやらせようというつもりはありませんが、とにかく文字や言葉に対して、すごく好奇心が旺盛なのです。

また、ただ漢字が読める、本が読める、というだけでなく、人の話がきちんと聞けたり、挨拶や感謝の言葉がきちんと言えたりする、というようなしつけの部分まで、幼稚園の漢字教育を通して教えていただいているような気がします。

そういう面では、すごく内面的にしっかりしていて大人なので、私自身、以前なら「この子には、まだちょっと早いかな」と思うようなことでも「もしかしたら、できるんじゃないかしら」という感じで、いろんなことにトライさせてみようと考えているようになってきました。

頭がいい親の3歳からの子育て
そんなふうに、子どもの可能性を広げてくれるところも、漢字教育の効果の一つか

もしれません。

「石井式をベースに言葉と音感の教育で内面が豊かに」

いずみ幼稚園(足立区)

園長 小泉敏男氏

いずみ幼稚園では、石井式漢字教育を実践してすでに二十年近くになりますが、その導入のきっかけとなったのは、知人の紹介で出席した石井式の勉強会で、石井先生ご自身から言われた「君たちは、今、子どもたちを十分に満足させるだけの仕事をしているという自信があるか」というひと言でした。

当時、私の園ではちょうど三歳児のクラスを新設したばかりで、従来の二年保育の内容をゆっくりと噛み砕いて行って目標設定が低かったこともあり、一年がかりで、

どうか「整列」や「前へならえ」ができるようになるといった有り様でした。

従来の幼児教育に疑問を感じ「子どもを預かるからには、きちんと目に見える成果がなければ、教育とは言えないのではないか」と思い、何か幼児に適した教育法がないものかと模索していた時期だっただけに、石井先生の言葉は痛烈でした。

さらに先生は「もし実践して私の言うことに嘘がある、間違いがあることが判明したなら、あなた方に一〇〇万円ずつ差し上げよう」ともおっしゃいました。そこには小学校や幼児教育の現場での実践や、知的障害児ですらこの教育法で本が読めるようになるという実績に裏付けされた、ご自分の教育法に対する確固たる自信が感じられ、この言葉がかえって鮮烈な印象で、すごく感激したことを今でも覚えています。

実際には、石井式の導入を決めてからも職員や保護者からは「幼児に漢字など必



園児たちの名前は全て漢字で

要ない」といった声が少なからずありました。そこで「何かマイナスがあるようなら、すぐにやめるから、とにかくはじめてみよう」と半ば強引にスタートさせたのです。

すると、まず職員は、子どもたちが漢字で書いた自分の名前をすぐに覚えてしまうのを見て「これはすごい」と、子どもの能力の素晴らしさに驚きました。保護者も、実際にわが子がどんどん漢字を読めるようになる姿を見ると、やはり嬉しいものですから、むしろ以前より、わが子の教育に関心が高まってきました。

私自身が実感する漢字教育のいちばんの効果というのは、やはり集中力と理解力がまったく違ってくるということです。

漢字教育を実践すると、三歳児でも、わずかひと月でしっかりと整列できるようになりましたし、運動会などの行事の練習も、先生の話がきちんと聞けて理解も速いので、以前の半分も時間がかからず消化してしまいます。そのことを「よくできたね」と

評価してあげると、それが嬉しくて、今度は新しい課題にみんなで挑戦しようとする意欲とか楽しみも自然にまして、さらに子どもが生きいきとしてくるのです。

また、私の園では、石井式と同様に幼児期の適時教育として「ミュージック・ステップ」という幼児のための音感教育にも力を入れています。この創始者であり作曲家の譜久里勝秀氏が考えられた教育法は、石井式と類似性が多く見られ、

特にカリキュラムの導入部では、漢字を利用しての手法がうまく生かされています。

たとえば、三歳児のいちばん最初の課題では、まず、元気よく返事をするこの大切さをテーマにしたお話を、キーワードを漢字カードで示しながら子どもたちに聞かせます。すると、子どもたちは、ただ耳で聞く以上に集中し、お話の世界に入り込むことができます。

そこで、次に「正しくお返事」という歌をみんなで歌います。「お返事ハイッ、正しくハイッ」という短い歌詞ですが、お話の内容がそのまま表現されているので、子どもたちは、生きいきとしたイメージを感じながら歌います。さらに、今度は歌詞の「ハイッ」の部分で、みんなで一緒に手を叩くことを覚えます。

こうして、子どもたちは楽しみながら、自然な形で音楽に触れ、一音節のリズム打ちという第一の課題をマスターしていきます。このようなリズムや並行して体験する

リトミックでの音との出会い、そうした小さな積み重ねを続けるうちに、すべての子どもたちが、園での三年間で絶対音感を身につけることができるようになるのです。

ミュージック・ステップのもう一つの大きな特徴は「子どもが自ら感じる力」をたいへん重視しているところです。たとえば、音楽に合わせて体で表現をするリトミックは、多くの幼児教育の現場で取り入れられています。そのほとんどは、先生が「はい、今度は、ライオンさんになってみましょう」などと、先回りして指示を出すものです。しかし、ミュージック・ステップでは、あくまでも子ども自身で音楽の変化を自分の耳で感じて判断して表現するように配慮されています。

こうしたことは、音に集中し、音感を研ぎ澄ますのに大切な要素であるというだけではありません。何でもまわりから言われなければならない受け身の態度ではなく、自分で考え、判断し、行動できる子どもに育てていくうえでも、大きな意味をもって

いるのです。

幼児教育の中には、幼児のIQを上げることだけを目的に、早いうちから左脳を鍛えるトレーニングばかりを行うものも少なくありません。しかし、そういう子どもが小学校の高学年頃になって伸び悩んだり、感性が極端に欠落していたり、という例を私は多く見えています。

その点、石井式も、ミュージック・ステップも、小学校教育の先取り教育ではないので即効性はうすいが、人間のいちばん大事な基礎の部分をしっかりと育てる、ということろでは共通していると思います。つまり、幼児の脳の配線をどんどんつなげていくばかりではなく、脳全体のキャパシティを広げていくような教育なのです。

現在、小学校の教育現場では学級崩壊など、さまざまな問題が表面化しており、それに伴って、幼児教育のあり方が改めて問い直されております。

そんな時代だからこそ、漢字を覚えたり、音を感じるといった、幼児期なら誰もがもっている高い能力を生かしつつ、子どもの内面を豊かに成長させていく、石井式やミュージック・ステップのような教育が、ますます重要になってくるのではないかと思っています。

「考える力、豊かな感性を引き出すのが漢字の素晴らしさ」

石井式国語教育研究会

講師 A・E先生

「石井式能力開発教室」は、一歳六カ月から小学校三年生までを対象に、漢字を通して、お子さんの国語力の基礎を育てることを目的とした教室です。

一歳六カ月から、と聞くと、大抵の方は驚かれますが、まだ言葉の出ないお子さん

でも、先生が見せる漢字カードを目にし、隣に座ったお母さんがそれをくり返し読むのを耳にしていると、頭の中には言葉としてきちんと定着していきます。そして、たとえば、体の部分を表す漢字をやっているときに「では“爪”はどれかな？」と尋ねると、たくさんあるカードの中から、きちんと“爪”のカードを指差することができるようになります。

さらに、そうしたお子さんがいったん発語するようになると、今まで蓄積された言葉を一気にほとばしるように話しはじめる感動的な光景に出合うこともしばしばあります。

これは、言葉を音だけでなく視覚的なイメージとして定着させることができる、目で“見る言葉”としての漢字ならではの素晴らしさだと思います。

もともと幼児期の脳は、理屈で考えるのではなく目や耳から得た情報をそのまま丸暗記する、いわゆる機械的記銘能力がもともすぐれた時期にあります。ですから、大人が難しく感じる画数の多い漢字でも、幼児期の子どもは、むしろその複雑な字形を手がかりとして、苦もなく覚えてしまうのです。

また、この幼児期特有の機械的記銘能力を十分に刺激しておくと、脳の次の発達段階である理屈で考える力、すなわち論理的記銘能力をも大きく伸ばすことができるのです。その意味で、漢字教育は、まさに幼児期ならではの、真の適時教育と言えるでしょう。

とはいえ、石井先生がよく「漢字を教えるのではなく、漢字で教える」とおっしゃるとおり、漢字はあくまでも手段であって、それ自体が目的ではありません。ですから、教室でも、漢字を“教え込む”のではなく、まず私たち先生自身が楽しむということ、心がけながら、子どもたちに興味・関心のある題材をゲーム感覚で無理なくくり

返すことで、言葉としてしっかりと定着させるようにしています。

具体的には、漢字の絵本が、幼稚園の年長さんまでの中心的な教材となります。まず、絵本の中の、くり返し出てくる漢字や子どもが関心をもちそうな漢字をあらかじめカードにしておき、先生がそのカードを黒板に貼りながら表現豊かにお話をする（これを「素話」といいます）からはじまります。またそれと並行して、その漢字カードを使って、フラッシュカード（一瞬だけカードを見せ、漢字を読んでいく方法。潜在意識にイメージが定着しやすく、集中力を高める働きもあります）や、パズル、ゲームを通して、くり返し読むことで言葉として定着させていきます。

すると、子ども頭のの中には絵本のお話の内容がすっかり入ってしまい、しかも、絵本の文字を目で追う手がかりとなる言葉（漢字）もすでに定着しているので、先生が読むのに合わせて、指で文字をなぞっていく「なぞり遊び」さらには、先生と一緒に音

読する、自分ひとりで読む、というようなことが自然な流れの中でできるようになるのです。

また、教室では、諺や俳句、『百人一首』、それに『竹取物語』のような古典や『論語』なども、幼児期のお子さんにも積極的に与えています。意味はわからなくても、これらのもつ美しい言葉の響きや独特のリズムを楽しく感じるができるだけで、言葉の感性を磨くのにとても役立ちますし、成長の過程で少しずつ自分なりの理解も深まっていくものなのです。

教室に通う年長の女の子のお母様から、こんなお話を伺ったことがあります。

「ご家族そろってスキーへ行ったところ、あいにくの雨模様で、女の子は早くこの雨が止んでくれないかと祈るような思いで空を見上げていました。すると、その願いが通じたかのように、雨が次第に雪へと変わりはじめたのです。その光景を目にしたとき、



漢字の成り立ちが分ると覚えやすい

彼女の口から不意にこぼれたのが「面白し雪にやならむ冬の雨」という、以前教室で習った芭蕉の句だったということです。教室では、先生の側から「この句はこういう意味ですよ」と解説することは一切ないのですが、はっきりと意味がわかっていなくても、句と同じような情景に出合ったとき、そのイメージが、ふっと言葉として出てくる……、これはとても素晴らしいことだと思います。

さらに、漢字というのは、ひじょうに論理的、体系的にできた文字ですので、子どもの考える力を引き出す素晴らしい力をもっています。すでに述べたように、機械的記銘能力をよく刺激すると、理屈でものを考える論理的記銘能力も早く伸びていきますから、漢字教育を受けている子どもも多くは、やがて「蟻や蟬は、同じ虫の仲間だから“虫”という字がついているんだね」というようなことを自分で発見したり、「胸や服、腰っていう字は、何で体の部分なのに、“月”という字がついているの?」といった疑問

を自然に抱くようになってきます。

そこで、年長さんの後半くらいから徐々に取り入れているのが、漢字の成り立ちを説明しながら子どもとともに考えていく解字指導です。

たとえば、筋のたくさん入った肉をかたどったのが“肉”の字であること、そしてこの肉体という意味の“肉”の字がさらに変化してできたのが“月”、いわゆる“ニクツキ”であることを黒板に図解しながら楽しくお話ししてあげると、子どもたちは、ます

ます漢字に興味をもつようになり、今度は、はじめての漢字に出合っても、自分なりに分析したり推理を働かせたりして、その読みや意味を考える力までついてくるのです。

このように、幼児期から楽しく漢字に触れて育った子どもたちは、ほとんど例外なく本を読むのが大好きです。また、語彙が豊かですから、学校へ行っても先生のおっしゃることがよく聞けて、きちんと理解できる子になります。

最近、学級崩壊や少年犯罪などがよく話題になりますが、幼い頃から、たくさん美しい言葉に触れていると、子どもたちの中には複雑な人の心を理解し、思いやる心もきちんと育ててくれているのではないかと感じています。

「漢字で言葉の力や子どもの個性、やる気も伸びている」

石井式能力開発教室 東京・恵比寿教室

五歳児のお母さん 麻布三希子さん

息子が教室に通いはじめたのが二歳半くらいのときからですので、もう三年半くらいになります。

男の子のほう言葉が遅い」というようなことをよく言いますし、うちは主人と私、息子の三人だけの家族で、始終家の中で会話が飛び交うという環境ではありませんでした、ですから、だんだん言葉の問題を意識するようになって、すぐ近所にあったこの教室にお話を伺いに来たのが最初のきっかけです。私自身、以前から国語や俳句、古典といったものにとっても興味をもっていたので、子どもと一緒に楽しめれば、という思いもあって入会を決めました。

とはいえ、実は教室に通い出した最初の頃は、まだ幼かったこともあって、子どもが授業中、椅子にじっと座っていられず、ちょっと外で音がすれば立ちあがって窓の外を見に行ってしまう、というような時期がありました。

そんなとき、先生は決して無理に子どもを連れ戻そうとしないだけでなく、私にも「手や口を出したりせずに座っててください、そうすれば、その姿勢を見て、今は座っているのが大事なのだということが、お子さんにもわかりますし、お母さんが楽しんで漢字に接していれば、お子さんも必ず興味をもってくれます」とおっしゃって、私だけが先生に続いて本を読んだりしていたこともありました。

その間、せっかく来たのにちっとも子どものためになっていないのでは」と、不安になることもありましたが、実際、一ヵ月、二ヵ月と続けていくうちに、いつの間にか子どももきちんと椅子に座って、先生のお話をしっかりと聞けるようになっていました。

そのとき、先生がおっしゃってくださった言葉は、今でも私の育児のうえでの心の支えになっていて、私自身、しつけの基本なようなものを教えていただいたような気がしています。

息子のほうも、授業に集中できるようになるにつれ、漢字に対する興味がどんどん湧いてきたようで、三歳ぐらいのときから、私が新聞を読んでも隣からのぞきこんで「あ、この字、知ってるよ」としきりに話したがるようになってきました。

一度、天気予報欄に載っている地名の読み方を聞かれたので、一つずつ教えてあげたら、翌日には自分で新聞を広げて「鹿児島は晴れだね」なんて言うんです。街を歩いているだけでも、看板や標識に知っている漢字があると、別々に習った漢字の組み合わせでも自分で考えて読んでしまったり……、そんな子どもの能力の高さには、ほんとうにびっくりさせられます。

それに、絵本や俳句などでさまざまな言葉に触れているせいか、同じ年頃のお子さんど比べると、語彙が豊富で、同じような意味の言葉でも、そのときどきで「走る」「駆ける」「駆け出す」など、違った表現をしたりします。使い分けは必ずしも正確でないときもあります。今はまだ、それをとやかく言うのではなく、まずは豊かな表現を少しずつ身につけていってくればと思っています。

家でも、教室の教材の絵本を読んだり、漢字カードでゲームをしたり、あとは俳句や諺のカルタをしてよく遊びます。特にカルタ取りは大好きで、一度やると、もう一回、もう一回という感じですが。

はじめは、もっぱら私か読み手で、子どもは札を取る役ばかりやりたがっていたのですが、この頃は、読むほうも十分できるようになったので、主人が家にいるときは交代で読み手を担当して、残りの二人が対戦したりしています。子どもは教室でお友達

ともしょっちゅうやっているの、札を取るのも速いのです。

教室に通うようになってから、子どもは内面的にもずいぶん成長したような気がします。たとえば、何事にも物怖じせず積極的に取り組めるようになったり、あるいは、興味があることに対して「どうしてなんだろう」「なぜだろう」と自分か納得するまで掘り下げて考える姿勢であるとか。

そういう面でも、単に漢字を教えるというのではなく、子どもの個性ややる気をその子の性格に合わせて引き出してくださった先生方には、感謝の気持ちでいっぱい、小学校に入ってから、本人が教室へ行くのを楽しみにしている間は、ずっと続けさせたいと思っています。

「絵本で母子の触れ合いが増え、本好きで感性豊かな子に」

「石井式漢字教室」通信講座

四歳児のお母さん T・Hさん

石井式漢字教育のことはじめて知ったのは、今から十年ほど前、いちばん上の息子が幼稚園の年中、二番目の娘が二歳の頃のことです。井深大さんが設立された『幼児開発協会』の月刊誌に「本を楽しんで読める子どもを育てる」という内容で紹介されていました。私自身、子どもたちにはぜひ本が好きになってほしいという思いがあったので、すぐに通信コースを申し込みました。

以前から、よく絵本の読み聞かせはしていたので、教材の漢字の絵本が届いたときは、子どもたちは二人とも興味津々。はじめて見る漢字カードにも「ねえ、これ何、何？」とすぐに関心をもってくれましたし、指導法もビデオでわかりやすく解説し

てあったので、わりとスムーズにはじめることができました。

わが家の場合、寝る前の時間を漢字学習に当てていて、まず絵本の中の漢字をカードにしたものを子どもたちに読ませ、絵本を読み聞かせてあげてから、もう一度漢字カードを読んで寝る、というパターンで続けていました。毎日わずか十分ほどの時間ですが、子どもたちもそして私自身もとても楽しくて、お互いに満足して眠りにつく、という感じでした。

ただ、漢字というのは小さい子のほうが早く覚えてしまうようで、子ども二人と一緒にやっている、妹が一度で読めた漢字でもお兄ちゃんのほうは時間がかかったり、というようなことがあります。すると、つい「どうして読めないの？」なんて思ってしまいますが、電話指導で、子どもが「僕、できない」「私、できなかった」と感じることはないよう、そんなときはお母さんが「これは○○ね」とさらっと流してくださいというアド

バイスをいただいて、それで楽しく続けていくことができました。

電話指導の先生には、直接漢字教育に関わることでだけでなく、子ども精神面の発達など子育て全般に関して、先輩ママさんとしていろんな相談に親身に乘っていただき、すごく感謝しています。

その後、上の子が小学校一年生のときに、主人の仕事の都合でインドネシアに転勤になり、一年半ほど現地に滞在していたため、石井式漢字教育ともしばらく疎遠になっていました。そして、帰国後に三番目の女の子が生まれたのですが、昔ほど体力がなくなったこともあって、私自身、心にゆとりがなく、精神的に少し追い詰められていた時期でもありました。そうした私の精神状態を反映してか、子どもも笑うことが少なくて……。

そんなとき、ふと上の二人の子どもたちと絵本を読みながら楽しく過ごした情景

がよみがえってきて、それで「もう一度漢字教育をやってみよう」と思ったのです。

効果はてき面でした。当時一歳半だったいちばん下の娘は、はじめるとすぐに、漢字カードや絵本を読む時間をとても楽しみにするようになって、表情も明るく生きいきと変わってきたのです。

その娘も、もう幼稚園の年中になりましたが、今ではどこへ行くにも絵本を持っていくほど、本は大好きです。上の子たちも、高一になる息子は社会や天体のこと、中一の娘のほうは国語や生物と得意分野も違いますし、漫画もよく読みますが、自分が興味のある事柄については、自発的によく本を読んでいます。いわゆる活字アレルギーのようなものは、まったくないようです。

また、三人とも感性とか相手の気持ちを深く思いやる能力は豊かに育ってくれていると思います。たとえば、まだいちばん下の子がお腹の中にいたとき、小学二年生だっ

た真ん中の娘が「私かお腹の中にいたときは、お兄ちゃんが絵本を読んでもらっているのを一緒に聞いていたから、今度は私が赤ちゃんに聞かせてあげる」と言って、絵本を毎晩読んでくれたことがあって、すごく嬉しかったです。こうした内面的な成長も、漢字教育の影響が大きいのではないのでしょうか。

さらに、とかく忙しさに流されて、何かをじっくりとやる時間をとるのが難しい子育ての時期に、漢字教育が一つのメリハリとなって、絵本を挟んで子どもたちと心を通い合わせ、温かい母子関係を築くことができた——そのことが、私自身にとっても何より大きな宝物だと思っています。

「漢字には子どもを伸ばす不思議な力が秘められている」

日本漢字教育振興協會理事長(元船橋市立法典東小学校校長)

土屋秀宇氏

石井式漢字教育の実践から遠ざかって久しかったのですが、小学校の現場で、ふたびその実践を試みることを思い立ったのは平成二年、私が船橋市立法典東小学校に校長として赴任することになったときでした。

私自身、学生時代から国語国字問題に関心があり、「国語問題協議會」の会員でもありましたので、「ひらがな先習」や「読み書き同時学習」、「じどう車」「注しや」といった「交ぜ書き」など、現行の国語教育の弊害を指摘されてきた石井先生のお考えには、以前から深い共感をもっていました。ところが、現実問題として長年中学の英語教員をしていた私には、直接、国語教育に関わる機会がありませんでした。それが校長職

となり、はじめてチャンスが巡ってきたというわけです。

石井式漢字教育の実践にあたって、まず最初にすべきことは現場の先生方の理解と同意を得ることでしたが、学習指導要領とおりの「ひらがな先習」に何の疑問も感じない先生方の固定概念を打ち破ることは思いのほかたいへんな作業でした。

そこで私は、二つの方向から説得を試みることにしました。一つは、お子さんをおもちの先生に、実際に家庭で試してもらって、「子どもにとっては、漢字のほうがひらがなより数段覚えやすい文字である」ということを実感してもらおう方法です。

そして、もう一つが、大脳生理学からのアプローチでした。人間の脳は幼児期から小学校低学年までは、まだ右脳優位の時代です。一方、言葉の活動は通常左脳の働きによるもので、ひらかなやカタカナ、そしてローマ字、アラビア文字など、表音文字はすべて左脳で処理されます。

ところが、その中であって、ただ一つの例外が漢字なのです。漢字だけが左右両方の脳を同時に使って処理されているのです。しかも、「やま」とひらがなで書いて見せた場合に比べ、漢字で「山」と書いて見せた場合のほうが脳の中で処理されるスピードは何倍も速いわけです。

ですから、右脳優位で生きている低学年の子どもにこそ、ひらがなより漢字のほうがはるかに覚えやすく、また理解しやすい“嬉しい文字”なのです。

こんなことを根気よく力説し続けていくうちに、先生方の気持ちが一つになって、全校を挙げて漢字教育の実践に取り組みはじめたのは、赴任して三年目の平成四年度からのことでした。この平成四年度というのは、ちょうど文部省の学習指導要領が改められ、学年別配当漢字以外でも、ふりがなをつければ提示してよいなど、漢字に対する扱いが多少弾力化した年でもあります。その意味では、まさに機が熟してのス

ターゲットだったと言えるかもしれません。

さて、その実践の具体的内容ですが、

① 読み先習

② 解字指導

③ 名詩・名文の朗読・朗誦

の三つを大きな柱としました。

①の読み先習については、まず漢字で教える環境づくりとして、入学当初から児童の氏名はすべて漢字で表記し、プリント、掲示物などでも漢字で書くことが常識とされている語句ははじめから漢字で示し、必要に応じてルビを用いるようにしました。

そして、国語の教科書には、頻度の高い言葉や漢字に直したほうが理解しやすい言葉(たとえば「しゃ道」「車道」など)は、ひらがな表記された本文の上に漢字を貼り

付けていく“貼り漢字”を施すとともに、他教科においても漢字表記のほうが理解を助けると思われる語(たとえば「さんかくけい」は「三角形」、「防さ林」は「防砂林」など)については、漢字で教える試みをしました。

すると、漢字表記のほうが「角が三つある形だから三角形」というように言葉の意味がイメージとして捉えやすいため、これまでのひらがな中心の指導と比べ、子どもたちの学習に対する理解や意欲が明らかに違ってきました。

さらに、国語の教科書に貼り漢字をする過程で同じ漢字をくり返し読むため、各単元のはじめにその作業を終えると、すでに多くの子どもがすらすら音読できるようになっていくという、予期しない効果が顕著であることもわかりました。

②の解字指導は、教科書に出てくる主要な新出漢字について、その成り立ちから意味を理解させる試みです。たとえば「雪」という字の下の部分「ヨ」は手を表しているこ

とを話し、「お空から雨が降ってきて、手のひらに乗るようになったものは何だろう?」
と聞くと、子どもたちは元気よく「ゆき!」と答えます。

また、「右」と「左」の筆順は、「右」がまず斜めの払いを先に書き、「左」は横線を最初に書くように教えます。イメージの右脳から論理・分析の左脳へと移行する時期にある子どもたちは、当然「どうして?」と疑問に感じます。ところが、小学校の先生のほとんども、この疑問に答えてあげていないのです。このような疑問も、漢字の成り立ちを示してあげることで、すっきりと説明がつかます。そして「へえ!、そうだったんだ!」「面白い!」という驚きや感動があるので、一度教えると子どもたちは忘れることがありません。

さらに素晴らしいのは、解字指導を続けていると、子どもたちは新しい漢字に出合っても「先生、待って。教えないで」と、まず自分たちで推理したり「じゃあ、自分の名前



- 学校教育
- ・ しゃ道 → 車道
- ・ 糸 → 紙 → 氏

- 体系的教育
- ・ 糸 → 氏 → 紙
- ・ 雪 (ヨは手の意味)
- ・ しゃ道

体系的な解字指導を行なうべき

にはどんな意味があるんだろう」と進んで辞書を引いたり……と、自分の頭で考える意欲や自分で調べて知る喜びが自然に生まれてくることです。

低学年のうちから漢字を積極的に与えていくことに反対の立場の人たちは、現在の小学校の配当漢字一〇〇六字でも「多すぎる」と主張します。確かに、一年生で「糸」、二年生で「線」を習い、四年生になってやっと「氏」が出てくるというように、何の脈絡もなく個々の漢字をバラバラに教えていく今の教育法では、子どもたち

の負担は相当なものです。

ところが、低学年ではまず単体の象形文字からはじめ、高学年にいくにしたがい、それらを部首として組み合わせた文字を学習するというように、体系的な解字指導を行っていけば、苦もなく漢字を学べるだけでなく、こちらから全部教えずとも子どもたちが自発的に考え、理解することまで可能になるのです。

③の名詩・名文の朗読・朗誦は、語彙や表現の宝庫である古典、名作を通して、美しい言葉や豊かな感性を育むことを目的に、帰りの会などの短い時間を利用して、漢字の絵本（低学年）、『蜘蛛の糸』『安寿と厨子王』などの名作（中・高学年）に加え、詩、俳句、諺、漢詩、『百人一首』などに取り組みました。

ここで改めて実感したのは、子どもたちは、漢詩や和歌、俳句など文語文特有のリズムや音の響きが大好きだということで、ある先生が「今日は会議があるので、お休みにしよう」と言うと「ダメー」の大合唱になったこともありました。

漢詩は、まず先生か模造紙に書いた白文（返り点や送りがないもの）を指差しながら範読したあと、子どもたちが先生に続いて読んでいくのですが、その上下に行ったり来たりしながら読む、というのがまた、子どもたちには面白いらしいのです。

その漢詩に関して、こんな興味深い事例もあります。ある一年生のクラスで、教えただばかりの漢詩を「もう読めるようになったから聞いて」と言って毎回、先生のところへやってきた子どもが三人いました。そのうち二人はたいへん成績の優秀な子でしたが、もうひとりには主要四科目は全部下位の子どもです。しかし、その下位の子ども、他の二人に少しも遜色なく、正確に読めるようになっていくことがわかりました。

こうしたちよつと意外な結果も、すでにお話した大脳生理学の観点からなら、容易に理解できます。成績が下位の子どもは、どちらかという論理・分析の左脳の働

きが弱いのです。ところが、ひらがなやカタカナと違い、漢字なら右脳でも処理できるので、成績下位の子どもでも楽しく参加でき、自信がついてくる。すると、学習への意欲も増し、成績も上がってくるという、素晴らしい循環が生まれるのです。

これは、自閉症やダウン症などのいわゆる知的障害児についても言えることで、彼らは、ひらがなよりも漢字を好む傾向が顕著です。

実際、私が次に赴任した船橋市立船橋小学校の特殊学級で漢字学習を取り入れると、子どもたちは生きいきとした表情で漢字を読み、理解力や発語・コミュニケーションの能力でも飛躍的な進歩をみせるようになりました。

漢字には、このような“靈妙な”でも表現したくなるような、子どもを伸ばす不思議な力が秘められています。それも「人間は言葉の動物である」ということを考えれば当然のことです。人間は生まれながらに言葉を欲しているのですから、その言葉をもたち自らが旺盛な食欲でそれらをどんどん吸収しはじめるのです。

ところが、これまでの学校教育では、漢字はふさわしい時期、内容、方法で子どもたちに与えられず、いちばん漢字を覚えやすい時期（低学年）にひらがなから教え、読み書き同時学習を強いることで、たくさん漢字嫌い、国語嫌いの子どもを生み出してきました。これは、教育としては明らかに失敗だと言ってもいいでしょう。

法典東小での漢字学習への取り組みは、私の転任後も続けられ、その成果により平成六年には、第四十三回読売教育賞の国語部門で優秀賞を受賞しています。こうしたことが、従来の国語教育のあり方に一石を投じることになればと思います。

そして、栄養のぎっしりと詰まった漢字という智恵の実を子どもたちに、もっと美味しく食べさせてあげる、そんな漢字指導が教育の現場に広がっていくための、一つのき

っ
か
け
に
な
る
こ
と
を
心
か
ら
願
っ
て
止
み
ま
せ
ん。
。